

2016.8.31

# 現代俳句千葉

122号

巻頭エッセイ

句会は二次会で花ひらく 幹事 大塚弘毅



申年の今年。満八十四歳になりますが、俳句の道に入って十余年の私はこの世界ではまだまだひよっこです。俳句を語る資格はありませんが、お酒のことなら語れます。

「捨ててこそ生きる」と言った「捨てて聖」の一遍遊行上人ではありませんが、句作ではなかなか出来ない捨てることも、酒の世界では出来ます。

当協会では、津田沼俳句研究会、青葉俳句研究会に参加していますが、その捨てる大きな悩みの種です。長い間の会社生活で、習性になった「言いたいことはすべてぜんぶ簡潔に表現して」が、七五の短詩ではなかなか捨てられない遠因になっています。

季節の景物を詠み込むと言う俳句には季語がつきものですが、これが難しい。「付きすぎず、離れすぎず」の季語が、何故こんなところに付くのだろうかと考えてしまいます。酒の旨さは酒の場・仲間にあると云われますが、この点は句会も変わりありません。しかし句会では選

句と言う他人様の評価があります。俳句にはルールがあり、俳句の世界に高齢者が多いのはこのルールを自然に呑み込んで自由自在に句作するためだと思われま

「捨てること」と「季語との取り合わせ」は感性が関係しますが、これは年月とは無関係でしょう。しかし、これは容易なことではありません。感性には人それぞれの人生歴があり、この選択で無理強いするのは難しいのではないかと思ったりもします。酒席のように、楽しむだけなら簡単ですが。その人の裏にあるいろいろな凸凹は様々ですから同感者を得るのは難しいのが当たり前で、一つの作品に選句が集中するのは他人様に理解出来るような公約数を会得しているか、表現したい凸凹を削っているのかと勘繰ってしまいます。

私が高校時代に習った恩師に坂村真民先生と云う立派な俳句詩人がいますが、そのお言葉に「自分の花を咲かせよう」と言うのがあります。参加している句会はその出身句会が異なる為か、それとも参加の方々のお人柄か、それは談論風発楽しいものです。俳句にはどうも他人に理解し兼ねる部分が少し残るのが佳句のようです。そして酒席の自由さは、行き交う言葉を耳に留めることが勉強にもなるのは確かなのです。

## 目次

句会は二次会で花ひらく 大塚弘毅	1
諸家近詠	2~4
私の感銘句	5~9
津田沼研究句会報告	9
青葉研究句会報告	10
柏研究句会報告	10
ひろば 新会員・会友紹介	11
会員・会友の近況	12
掲示板	12

千葉県現代俳句協会会報

## 諸家近詠

山崎 幸子

ジェット機は音を残して秋暑し  
 席取りの小袋を置き菊日和  
 瓢箪の括れ正しき通り雨  
 背後の虚ろ曼珠沙華曼珠沙華  
 わが影と石の翳濃く秋惜しむ

阿部 良治

茅花嘯む故郷離れるまで少年  
 昼顔やニユースなき日の刈羽村  
 関八州一都六県雪降るや  
 獣にも道しるべあり枯木山  
 年忘れ夜学も勤めも神田川

植原 安治

風船をとばしてみたき土鍋かな  
 ふらここは鳴子百合よりさびしいか  
 いつまである西日の街の担送車ストレヂヤイ  
 西日あつめ校長室の蝮酒  
 世に遠く拗ねて樹上の蝸牛

飯島 昭子

十万年後萌える大地や桃の花  
 ひと振りに大地の匂ひ春田打つ  
 早春や耳に雑木のささめごと  
 金縷梅のほぐれ初めたる光かな  
 春の日の扉開ければ絵本降る

岩佐 久

下総の男なつかし梅雨鯨  
 天空の大きな抜け穴六月尽  
 三門のかしこみかしこむ額の花  
 縄文の舟着跡炎天下  
 入道雲坂東太郎大海へ

渡辺 恵子

獄中に綴る針文字夕永し  
 砂山を歩く駱駝や春北風  
 何処より木琴の音養花天  
 聖堂を包むオルガン暮の春  
 夏燕和ろうそく屋の軒低し

井上きよ美

震災忌掌ほどの地蔵さま  
 蝌蚪の紐大きく動く活断層  
 眠れない夜は一つの青林檎  
 肘鉄へ食らいいつきたる大西日  
 南極に抱卵の鳥冬銀河

安斎謙太郎

五円玉拾わずに行く山笑う  
 春の虹おへその横の手術跡  
 初孫に叱られてる風光る  
 電柱のかげより巡查花大根  
 でこぼこのおせんべの先春の海

池田 博臣

冬のフィレンツェ浮世絵の顔で立つ  
 玻璃壺に春のかたちの角砂糖  
 洛北を天女のように春シヨール  
 点々の先の未来図ゆきやなぎ  
 鳥雲や峠の上の遍路杖

伊藤 典子

とこしえに轉やまず太宰の碑  
 たんぼぼ野たどればきつとブータンへ  
 うれしくて桃咲く里に繭ごもる  
 おしゃべりな三人姉妹柿若菜  
 忍冬ほほえんでただ側にいる

青木 一夫

疑いの深まってくる朱の牡丹  
 蝶生れる放浪癖がついたまま  
 風向きを捉えて野火が走りだす  
 独活の白刻む誤解のないように  
 草餅の匂いの中にある慕郷

池田 和人

収穫はシールズなりし去年今年  
 反骨をトゥクリセーターにて包む  
 着ぶくれる外なし政治貧しくて  
 だんだんと子の離れゆく潮干狩  
 寂聴も兜太も我も叫ぶ夏

伊藤 希眸

不揃ひの眉を化粧ひぬ冬ざくら  
 薇のひらき切るまで親でゐる  
 一と山を越え残雪の輝りあふ  
 飯を炊く蟬は七日の露を吸ひ  
 青葉の天聖歌に婚のべール曳き

大見 充子

放心のごとく風鈴山頭火  
 ふと金魚いくさは外の海のこと  
 切株の人待つごとく月の客  
 揺れている爪先立ちの十二月  
 憎らしき鳥に熟柿の十四、五個

加藤 法子

振り向かぬためにある蜥蜴の尻尾  
 蚊遣香てれ臭そうに置いてあり  
 受付の金魚に懐読まれたり  
 だまされてやるか白玉よく冷えて  
 あっぱっぱちやほやされたこともある

川嶋 悦子

月光がピアノの音を狂わせる  
地底から冬の足音仁王門  
戦は忘れ花冷えの乾門  
まだ眠たくてくすくすと桜山  
桜草の種採っている地震のあと

大坂 吉也

臨界はくちびる辺り立泳ぎ  
蟬しぐれ電柱からも唱和して  
借老や齷齪には触れず遠火花  
不如帰聞けば目をやる反射かな  
言の葉に乗りて幽霊ふはふはり

川又 優

桃のかたちにフクシマの桃洗ふ  
日を浴びて音符のやうなさくらんぼ  
白梅のほふ昭和の定食屋  
原発の風くる村に芋を干す  
姿よき秋刀魚のやうに寝てみたる

浦野 五郎

小春日やポストはどつと待つてゐる  
ひとすぢに年を惜しみつ手紙焚く  
死に神も吾が背より猪口年忘  
良きことは僅かがよろし梅探る  
左手にやさしく絞り若布和

大木 明子

菓子のごと箱より出してさくらんぼ  
歩くほど森深くなる雨蛙  
降りみ降らずみ森の奥なる半夏生草  
退屈な鹿の草食む小暑かな  
空つぼの象舎に花や星祭

菊地 京子

一木を人体としてどう芽吹く  
リラ冷えから書きだす恋文かもしれぬ  
火種申告せず椿の白樺派  
万愚節悪いわるいと片想い  
竹皮を脱ぐいちまいは古代裂

加納ひでこ

五月のドクター切除患部のポカン  
被災瓦礫うすきひとひらの惜春  
聞こえない音にげみずの物腰  
夏は「オーパ！」ヘアマゾンの怪魚へ  
午後の卓とことん白シャツと猫

小川トシ子

桜貝溺愛されていたような  
苦瓜のずぎんずぎんと明日かな  
天上は赤い実のほか何もなく  
生きているから等身大に枯れる  
放心の裸電球冬かもめ

岡田 淑子

伊勢海老やいろいろあつて夫婦でいる  
風船のかたちで赤ちゃん立ち上がる  
イチローの安打愛せり扇風機  
夕焼の帆をたたみいるスペイン語  
小海線風鈴列車の旅ゆるり

蛭名 節昌

花ミモザ何時より付きし遠見癖  
薔薇園を出て一身の覚束無い  
紫陽花の薄暗がり冷えという  
十葉の向こうは軽い時間帯  
柿青し物の哀れのように落つ

柏井 笙

日のかげらボケットに入れ種を蒔く  
枯木立寂しき夜は笑おうか  
袋綴じちよつとつついてパリ祭  
日向ぼこ赤いポストがあたたかい  
螢袋開いて何を入れようか

興津 恭子

稜線の向こうが見たい蕎麦の花  
検眼の音盗まれる秋徹雨  
秋の夜の音遠ざけて刃物研ぐ  
凄じき音の叛乱台風裡  
流失の記憶の裾に彼岸花

神作 仁子

徽の世に境界線のあらざりき  
生れしより旅の始まり百日紅  
原爆忌ジャングルジムに足あまた  
老木の影大いなる大暑かな  
戦争にほひありけり夾竹桃

大木 涼子

溜息をついて笑つて柏餅  
サングラス外し東郷青児の絵  
公園の遊具丸ごと灼けてゐる  
稿半ば腰の定まる処暑の椅子  
こんぺきのただこんぺきの秋の空

小野富美子

火宅抜け桜浄土に置く五体  
見えていて遠き山巔水温む  
水紋の伸び縮みして花筏  
春霖や素浪人めく男M  
もつれ合う蝶南溟に眠る考

## 諸家近詠

岡田美美子

悪の芽を摘み取り春の談話室  
病む人に告ぐる桜の底力  
夏めいてききわけのない葉指  
唐辛子干され脇役貫きぬ  
新涼や父の詩集と古時計

小野 功

しばらくは等身大の春に座す  
漂泊の時間溶けゆく若葉潮  
惜別やほたる袋の深さほど  
この星に生れた奇跡ソーダ水  
向日葵の恍惚とした雨あがり

岡崎 翠

万緑や矢印の指す蕎麦処  
桃の花また助産師の顔になる  
どの蟬の洋服なのと子の言へり  
卯の花腐し焼肉の火をほそめ  
散骨の船尾に膝をつけば秋

岡田 春人

初詣生者の足の音ばかり  
人間の面付けしまま豆を撒く  
紅梅より白梅まで視野検査  
あたたかや幸も不幸も誤解より  
悲しくて笑つてしまう落葉かな

大川富美代

青嵐や輸送中なる競走馬  
妙義嶺の奇岩怪石雲の峰  
造形の神いま宿る雲の峰  
恥ぢらひのエバの彫像風青し  
滝壺に槌打つごとく水落下

をがはまなぶ

雷落ちて犬は座敷に駆け上り  
梶子や白昼夢から咲き初むる  
毛虫焼く母は毛虫を見てをらず  
柿の花ガレの小さきランブかな  
大いなる春の光をもらひけり

太田まさ子

山笑ふ人体模型外し干す  
かたかごやムーアの伏目なす女体  
毒草も少しアロマへ四月見  
冴返る角地の父の満蒙記  
天の川へ青き首持て雑魚寝する

北村 妍二

薬湯の熱きに浸り広島忌  
戦争と平和は回り燈籠か  
サングラス一瞬にして負の世界  
曼珠沙華背に十字の手術痕  
枇杷の成る隣家職業不詳にて

岡山 敦子

松過ぎて体内時計の動き出す  
足裏刺す福豆入りのスニーカー  
黄水仙部屋に一輪句座よろし  
山霧に包まれ少女の頃になる  
結晶を葉先に置きて初雪舞ふ

金子 敏

河童忌や切れ切れの雲遠嶺まで  
残照にただす居ずまい白牡丹  
きりきりと竜頭巻き上ぐ蟬の羽化  
ためらいはわずかに頭初水中花  
ドローンの影が擦りよる小向日葵

遠藤 寛子

私のけもの道ある夏芒  
受験生帰宅後食らう冷奴  
子ら不動線香花火する間  
夏草も計算尽くの美術館  
後方で棚引く晒布外出す

片岡伊つ美

黒潮を越ゆる船足十三夜  
雅印もて仕上げの点晴賀状かく  
残り湯の何かと重宝年用意  
濁点のなき万葉のうた霜夜  
八丁目の並木何の木春の暮

内田 庵茂

指先の軟膏にほふ二月かな  
とび口を架けし長押や暮の春  
産声は呼吸の始め木の芽立つ  
濡れてゐる鎌倉の空岩たばこ  
訝しき英語のメール半夏生

加藤昌一郎

春月や影絵は影を脱いで寝る  
影踏みごっこしようと月が寄つてくる  
月光に限なく鉛色の私  
門をかけ月光を帰さない  
昼の月日向ぼっこに出て来たか

川上 典子

ふらここや少しだけ現実逃避  
春愁の折り鶴になるガムの紙  
風光るごめんなさいと言えたとき  
怒りとか意地とか嫉妬ではなく薔薇  
放たれしキューピッドの矢バラの棘

# 私の感銘句

山崎 幸子

作者名 号頁

荒神のまなこは故郷冬ざくら  
父も石母もまた石木菟が鳴く  
ユーラシアの果ての軒端の唐辛子  
寒晴や終着駅の海のいろ  
おなじ方向むく怖さあり葱の花  
風花は風の脱け殻愛は哀  
ゆく春をサンダル履きの街の角  
終戦の日スプレー缶に穴あける  
石庭に石の声聴く寒椿  
誰もいない私もない公園の秋  
ゆく春をサンダル履きの街の角

井上きよ美  
風花を仏陀の弟子に貰いけり  
父も石母もまた石木菟が鳴く  
鯛焼きの体温高き包み紙  
クロイツェル・ソナタ逃水の速さで  
後の世に辻もしあらば風船売  
アリバイは完全無欠蟬の穴  
青柿の転がる今も人見知り

小林 実 116 2  
加藤 法子 116 3  
越野 雄治 116 4  
片山 依子 117 5  
椎名 鳳人 117 5  
芝崎 梓 117 6  
高橋 健文 118 2  
徳吉洋二郎 118 2  
浜名 儀一 119 11  
鳴戸 奈菜 119 12  
高橋 健文  
人間は勝手なもので気分屋でもある。極寒を耐え、次の春爛漫を謳歌する。次には軽快な季節を恋い、極暑を嫌い、そして冬となる。このサイクルを堪能している。掲句もその様な季節の変化を機敏に捉えている。普段着の「サンダル履き」にスポットを当てそれに山でも川でもない「街の角」を据えている。季語の効果もあり、何気無いこのような作品を私は好きである。

消しゴムで消しても父の日肩車  
あの日から沖を見る癖いなし雲  
林檎むくたびメビウスの帯となる

内藤 富雪 118 4  
保坂 末子 119 9  
平木智恵子 119 10

杉山真佐子

野に伏して幾つきのう牛に虻  
大僧正生妻の匂いしていたり  
真空の都に自在寒鴉  
玉葱のマリネ涙は洒れるもの  
花ぐもりとはにわたりの蹲る  
軍艦なき軍港黒い春日傘  
大向日葵やるかたなきを支へをり  
皆同じ息せり汗の眼にスマホ  
蝶一頭蹄の音のかすかなる  
さよならの決定ボタン春寒し

黒澤 雅代 116 2  
植原 安治 116 3  
倉田たへ子 116 4  
片岡伊つ美 117 5  
塩野谷 仁 117 5  
重田 忠雄 117 6  
直江 裕子 118 2  
富澤さち子 118 4  
普川 洋 119 9  
馬場 益江 119 10

坂本千恵子

鯨にぜいご言葉は時に刺をもつ  
春夕焼厭されば帰る三輪車  
夕焼や余生に欲しき返り点  
花芒わたしの時間壊れゆく  
九条は宇宙のおもさ天道虫  
できぬ決断キャベツ一枚づつはがす  
七十路を折り返したき帰り花  
桜見る桜の風に抱かれて  
冬紅葉湖底に朽ちしもの声  
黒葡萄生涯無口な父であり  
黒葡萄生涯無口な父であり

國武 和子 116 2  
加藤 法子 116 3  
小河原清江 116 3  
片山 依子 117 5  
重田 忠雄 117 6  
鈴木美津子 118 2  
高橋由紀子 118 2  
高橋富久江 118 3  
長濱 聰子 119 9  
保坂ミエ子 119 11  
保坂ミエ子

季語の黒葡萄と父親への深い想いがこめられた御句に深く感銘いたしました。私自身の父への想いが重なりました。

また、季語との取り合せの巧みに共鳴いたしました。

佐藤美紀江

無条件降伏します日向ぼこ  
道祖神なかむつまじく夕焼ける  
壺焼の榮螺の愚痴を聞いてをり  
雲雀落つ十中八九胸に落つ  
花に哭け泣かねば散れず又咲けぬ  
蟻地獄覗く幼の目が熱い  
できぬ決断キャベツ一枚づつはがす  
無神論唱う種無し葡萄熟れ  
消しゴムで消しても父の日肩車  
解決をしないのも知恵ラムネ玉  
消しゴムで消しても父の日肩車

國分 三徳 116 2  
斉藤すず子 116 2  
菅野三重子 117 5  
塩野谷 仁 117 5  
佐久間真城 117 6  
椿 良松 118 2  
鈴木美津子 118 2  
千葉 智司 118 2  
内藤 富雪 118 4  
普川 洋 119 9  
内藤 富雪

千葉 信子

私のおい出される父は、働き続ける姿だけです。肩車をしてもらった思い出ありません。消したい事ありません。作者は、父親に対して屈折した思いがあり、行き違う思い、わだかまり。でも父の日には父の肩の感触を思い出してしまおうでしょう。なんだか羨ましい気持ちにさせられてしまいます。

桃のかたちにフクシマの桃洗ふ  
風花や声降りて来る滑り台  
花ぐもりとはにわたりの蹲る  
セーターに通す右腕遠くなり  
真つ先に布巾にかわくクロッカス  
切り干の大根すでに訛りたる  
勾玉の中にも梅雨の籠りある  
あいつかも蟋蟀上り込んで鳴く

川又 優 116 2  
金子 敏 116 4  
塩野谷 仁 117 5  
白木 暢子 117 6  
里見 さち 117 6  
下村 洋子 118 3  
中里 結 118 3  
樋口 博徳 119 9

仁王立ちして夏草に負けている

藤田 富江 119 10

誰もいない私もない公園の秋

鳴戸 奈菜 119 12

真つ先に布巾にかわくクロッカス

里見 さち

早春の花木は黄色が多い。臘梅、三椏、水仙、

連翹、クロッカス……と花の名前を数えるだけ

でも楽しい。

掲句の「真つ先にかはく布巾」とクロッカスは

日常的なモノであり、色である。どちらも記

号のように配置されているものの、微妙な浅春

のニュアンスを引き出し、布巾の端が指をかす

める写生句である。

純粹な心が迷わずに切り取った一瞬。作者が

心のファインダーから見た広やかな景色を共に

楽しませて頂く。

岡田 淑子

わたくしの鬱からころり枇杷の種

菊地 京子 116 2

レノン忌のぼつと生まれし冬すみれ

近藤 栄治 116 2

おなじ方向むく怖さあり葱の花

椎名 鳳人 117 5

花ぐもりとはにわたりの蹲る

塩野谷 仁 117 5

一通すつ燃やす闇より火蛾生まる

直江 裕子 118 2

美しい卵が二つ冬の家

高木 一恵 118 3

天上に句座あり花の隅田川

鈴木 和子 118 3

切り干の大根すでに訛りたる

下村 洋子 118 3

液状化するむ島国の暑さ

津高里永子 119 10

ジャンケン相手の相手が消えた八月

中村 冬美 119 11

天上に句座あり花の隅田川

鈴木 和子

一句一章の作品であるが、句座ありと軽く切つ

て一息入れて、花の隅田川と云う明るい平明な

季語がとて力強く伝わって来て、感銘した。

無駄のない句である。

福田志津子

芹なづな囃して叩く五十年

川又 優 116 2

煌めきし宇宙を指揮す寒昂

小高 稔 116 4

歩く鳥走る鳥いて冬干渴

小野 裕文 116 4

駅員の白き手袋東風を指す

笹沼 郁夫 117 6

一病が生きる力ぞ若葉風

佐々木 禎 117 6

灯下親しいつもオンなる電子辞書

高橋由紀子 118 2

真実を知りたし蟬の穴覗く

千葉 智司 118 2

聞き流すことも術なり夕涼み

菅ノ谷文子 118 4

あるがまま生けると決めてより涼し

長濱 聰子 119 9

青田風健忘症は生き易し

普川 洋 119 9

村上千代美

わたくしの鬱からころり枇杷の種

菊地 京子 116 2

幻聴のそのまま鳥になる雪夜

市川 唯子 116 2

石榴裂け古傷疼く鬼子母神

千葉 智司 118 2

脇役で終る奴ではない清水

田村 隆雄 118 4

炎屋の一撃タオル投げ込まれ

富澤さち子 118 4

カーテンを閉じれば哭いて雪岬

鈴木 郁子 118 4

仁王立ちして夏草に負けている

藤田 富江 119 10

家訓などなし暗闇の鏡餅

半田 千枝 119 10

木の実落つくぼみは深く生命線

原島 典子 119 11

霧の枕木目覚めぬ中に始発出る

野口 京子 119 12

わたくしの鬱からころり枇杷の種

菊地 京子

胸中に鬱屈と滞っていたものをふつきる、何

か佳き出会いがあったのでしよう。鬱は大きな

枇杷の種となつて喉から出た途端、晴れやかな

気持ち。

ころりが言い得て妙。爽快感が見えてきます。

中村 博子

原発の風くる村に芋を干す

川又 優 116 2

柚子湯して貧しきことを忘れいし

金田めぐみ 116 4

風あれば風の形にミモザの黄

小野富美子 116 4

この川の音より知らず糸とんぼ

片山 依子 117 5

春立てり水のいのちを合唱す

佐藤 浩子 117 6

できぬ決断キャベツ一枚つつはがす

鈴木美津子 118 2

青胡桃忽ち闇となる標

高野 春子 118 3

露律すずめも露の眼もつ

中里 結 118 3

父の忌の沖に向かへる蜻蛉かな

関 千賀子 118 4

露草や命は並べてひとつずつ

鳴戸 奈菜 119 12

露律すずめも露の眼もつ

中里 結

初秋の冷えを感じ始める頃、露けき雑草の繁

みに身を置くすずめ。そのすずめの眼が心なし

か涙つぼく潤んで露を帯びている様に感じる。

作者の小さき命への慈しみを持った観察力か

ら生まれた句と思う。露律の季語が良く効いて

いる。

人間はこの世で小さな生命力を持った動物や

植物と共存している。そうしたことに想いを寄

せ確かな観察眼と心配りのある句に魅せられる。

横須賀洋子

始祖鳥に似たものを食べ年忘れ

小林 実 116 2

道祖神なかむつまじく夕焼ける

斉藤すず子 116 2

涙拭くことを覚えて一年生

水戸 吐玉 116 15

向合えば背中が見える初鏡

椎名 鳳人 117 5

駅員の白き手袋東風を指す

笹沼 郁夫 117 6

終戦の日スプレー缶に穴あける

徳吉洋二郎 118 2

かまきりを箒に乗せて移しけり

田中 喜翔 118 3

日と月と漬ける赤かぶら白かぶら

杉山真佐子 118 4

防虫剤匂うだろうか菊日和 原島 典子 119 11  
 鼻のなきまねする人咳もする なかもと淑子 119 12  
 涙拭くことを覚えて一年生 水戸 吐玉

幼稚園までは顎をあげ大声で泣いた。殆んど  
 が欲望が叶わないことのくやしさとかなしき。  
 小学校、もうわがままは通らない。友達もた  
 くさんできたし楽しいこともふえた。喧嘩もす  
 るようになった。勝つても負けても共に泣いた。  
 俯いてそっと涙を拭う。べそ顔は見せない。も  
 う一年生だから。親だけがわかる成長のカタチ  
 かもしれぬ。

ふと口ずさむことになりそうな、ひたすら愛  
 しい句に会えた。

高橋 宗史

セーターのさみしき海に呼ばれてる 市川 唯子 116 2  
 闇汁の中より秘密保護法案 東 國人 116 3  
 向合えば背中が見える初鏡 椎名 鳳人 117 5  
 後の世に辻もしあらば風船売 塩野谷 仁 117 5  
 桃二つ寂しさ三つ置いてゆく 白木 暢子 117 6  
 少年に雛のうす闇はずかしき 高木 一恵 118 3  
 脇役で終る奴ではない清水 田村 隆雄 118 4  
 若竹となり大吟醸提げて来る 戸邊 光一 119 9  
 天の声地の声木々の芽吹く声 細根 栗 119 10  
 憲法は死にますか今朝露を煮る 並木 邑人 119 11  
 憲法は死にますか今朝露を煮る 並木 邑人

朝煮る露。夕方煮る露も充分にうまいのだが、  
 朝はより味わい深いかも知れぬ。うまみともう  
 一つの味、苦み。ひととき苦み走った表情にな  
 る。そして心中思惟「死にますか」と。「今朝  
 露を煮る」には確かなポエジーがある。

田口満代子

この川の音より知らず糸とんぼ  
 裸婦ともなれず寒椿ともなれず  
 うしろにもある青空と逃水と  
 船室に林檎の匂ふ夜明かな  
 手のひらの記憶をともし螢かな  
 水の動きは途方もなくて冬の風  
 林檎むくたびメビウスの帯となる  
 半跣して思惟いや秋思なすことも  
 べらぼうと棲む田の神や春の果  
 流山という駅前にある秋の暮  
 林檎むくたびメビウスの帯となる 平木智恵子  
 甘酸っぱい林檎の香りが漂う。林檎をむくと、  
 くるくると螺旋にたれるリングの帯、ふとメビ  
 ウスの輪を思った。他愛ないひとときの感傷。  
 メビウスの帯にとらわれず、この一句の雰囲気  
 を楽しみたい。

田沼美智子

春未だ力尽きたる大日輪 小出 治重 116 3  
 雲雀落つ十中八九胸に落つ 塩野谷 仁 117 5  
 桃二つ寂しさ三つ置いてゆく 白木 暢子 117 6  
 衰へを涼しさにして半跣跼坐 直江 裕子 118 2  
 アリバイは完全無欠蟬の穴 田中 喜翔 118 3  
 描きかけの鶴は帰りし麦の秋 田口満代子 118 3  
 迂闊にも声が年取る寒卵 田中 正恵 118 4  
 炎屋の一撃タオル投げ込まれ 富澤さち子 118 4  
 麻痺の娘逝く 雲のお椅子の揺れこち 政成 一行 119 9  
 綿菓子洗うに似たり月兔 畠 淑子 119 10

すかんぼやあつけらかんと飢えており

西澤 繁子

下村 洋子 118 3

風生の空より流るるさくらかな  
 底紅の溢るる路地や長崎忌  
 実石榴や砲台一つ島にあり  
 島ぢゆうの男が道に祭笛  
 仰向けの蟬しぐれ聞いている  
 家訓などなし暗闇の鏡餅  
 日向ぼこ二日生きれば一ト日老ゆ  
 樹木医の幹敲く音秋日和  
 時雨忌の女ばかりの句会なる

松澤 伸佳

粋に生き粋に逝きたる夏の蝶  
 春夕焼厭きれば帰る三輪車  
 花すすき記憶の糸を解いてゆく  
 菜の花に立てかけてある知恵袋  
 壺焼の榮螺の愚痴を聞いてをり  
 独学の左利きなり酔芙蓉  
 手のひらの記憶をともし螢かな  
 あの日から沖を見る癖いわし雲  
 残像のしつぽが走る青蜥蜴  
 無人駅降りて花野の人となる

高木 一恵

空や空の空の名僧今日の月 久保 筑峯 116 2  
 春待つや二人心のひとり旅 太田 涼子 116 3  
 山小屋も抱かれ寝まるや星月夜 田端 重彦 118 2  
 描きかけの鶴は帰りし麦の秋 田口満代子 118 3  
 砂山と瓦礫の山と敬老日 高桑婦美子 118 4  
 スーパーインスローモーシヨンの麒麟 細野 一敏 119 9  
 秋風や方陣を為す兵馬俑 檜垣 梧樓 119 10

鮫島いづみ 118 3  
 関 千賀子 118 4  
 藤岡 尚子 119 9  
 津高里永子 119 10  
 羽村美和子 119 10  
 半田 千枝 119 10  
 林 紀之介 119 11  
 保坂ミエ子 119 11  
 鳴戸 奈菜 119 12

遅き日や君等の主語が行方不明  
 時雨忌の女ばかりの句会なる 並木 邑人 119 11  
 可愛いがる猫より化けて小春の日 野口 京子 119 12  
 時雨忌の女ばかりの句会なる 鳴戸 奈菜

現俳壇における女性の活躍はめざましく、現代俳句協会の前会長、当千葉の前会長、また掲句の作者をはじめ綺羅星は数えきれず。芭蕉の命日を修する時雨忌の句会も、自ずと「女ばかり」となることは珍しくなろう。

女流の大先輩として蕉門の羽紅や加賀の千代女が有名だが、別所貞紀子著『江戸おんな歳時記』には、寛政年間の作〈子規ころに雨のふる夜かな 谷口田女〉も紹介されて、江戸巷間の近代的な感性の存在が知られる。

吉岡 一一三

とある日の節足動物なる枯葉 坂間 恒子 116 2  
 日体大卒のごきぶり現わるる 國分 三徳 116 2  
 大僧正生姜の匂いしていたり 植原 安治 116 3  
 裸婦ともなれず寒椿ともなれず 清水 伶 117 5  
 蟻々と連らなりやすき肢体もち 直江 裕子 118 2  
 花曇うかと仮面をはずしけり 高野 礼子 118 4  
 秋なのに桜ムンクにはまけるけど 番場 松香 119 10  
 遅き日や君等の主語が行方不明 並木 邑人 119 11  
 生類や音たてずゆく芋虫よ 沼山美津江 119 11  
 流山という駅前にある秋の暮 鳴戸 奈菜 119 12

田端 重彦  
 無条件降伏します日向ぼこ 國分 三徳 116 2  
 小春日や村の駐在いつも留守 北野 耕太 116 3

正論は何時も疎まれ懐手 久保さちを 116 3  
 校庭の巨きなさくら昭和の子 里見 さち 117 6  
 一通ずつ燃やす闇より火蛾生まる 直江 裕子 118 2  
 灯下親しいつもオンなる電子辞書 高橋由紀子 118 2  
 年おんな馬踏飛燕にこころ馳せ 高木 一恵 118 3  
 死は一人愛は二人の夏木立 内藤 富雪 118 4  
 冬紅葉湖底に朽ちしもの声 長濱 聰子 119 9  
 八十路婆仕切りてをりし盆踊り 根岸 ナツ 119 9  
 年おんな馬踏飛燕にこころ馳せ 高木 一恵

一一七号で作者は「汗血馬春の星座を駆け巡る」の一句に鑑賞文を書いている。私はその句の背景とスケールの大きさ、その文に感銘を受けたものです。

年女の作者が I S 国や近くの彼の国の無法な行為、欧州へ押し寄せるシリア難民や多発する自爆テロのこと等を憂い、年頭に憧れの天馬のようになって奮闘し、次々と解決する自分を思い描いている一句ではなからうか。

小池美佐子

暗くなる川の胸見て暑気払い 菊地 京子 116 2  
 風花の渚たとえば利那という 市川 唯子 116 2  
 朝の露アンドロメダの涙めく 加倉井允子 116 3  
 枯葦の暮色に重き波頭 小林 俊子 116 4  
 椿落つ海は軍艦連れてくる 窪田 俊作 117 5  
 うしろにもある青空と逃水と 塩野谷 仁 117 5  
 脇役で終る奴ではない清水 田村 隆雄 118 4  
 芹摘んで先の人生変るかも 半田 千枝 119 10  
 秋の風音をぶつけておとを消す 原島 典子 119 11  
 一人居の夜を時雨に放囲され 野口 京子 119 12

近藤 幸子

薫風を持ち帰るなら縄電車 黒澤 雅代 116 2  
 菜の花や屋根を重ねて漁師町 小野富美子 116 4  
 すなどりの月光荒き風の盆 庄司とほる 117 5  
 一寸の草水柱にも日のしづく 笹沼 郁夫 117 6  
 側溝はくれないの棺花吹雪 高橋 宗史 117 6  
 衰へを涼しさにして半跏趺坐 直江 裕子 118 2  
 鐘の無き鐘楼の跡敗戦忌 高橋 節夫 118 3  
 白雲を生み大滝の落ちにけり 高久 清美 118 4  
 もう誰のものにもならぬ鳳仙花 林 阿愚林 119 9  
 林檎むくたびメビウスの帯となる 平木智恵子 119 10

小林 実

哲学はシンプルがいい蟬の殻 國分 三徳 116 2  
 家系図に寒椿のみ咲かせおり 小張 直子 116 2  
 うしろにもある青空と逃水と 塩野谷 仁 117 5  
 桃二つ寂しさ三つ置いてゆく 白木 暢子 117 6  
 カーテンを閉じれば哭いて雪岬 鈴木 郁子 118 4  
 色即是空是非非も無く鉦叩 細野 一敏 119 9  
 枯野ゆく少年星を友として 中村 棹舟 119 9  
 少しずつ西へのめつていくすき 長濱 聰子 119 9  
 遅き日や君等の主語が行方不明 並木 邑人 119 11  
 秋の蝶なんじ梵字の化身なり 林 ゆみ 119 11

上野 紫泉  
 わたくしの鬱からころり枇杷の種 菊地 京子 116 2  
 鯛曇浜の男よ下向くな 高橋 由樹 116 15  
 若草を蹴上げ鉄棒決まりけり 佐々木幸子 117 6  
 桃二つ寂しさ三つ置いてゆく 白木 暢子 117 6



岩に波青鷺りんと動かざる  
 衰へを涼しきにして半跏趺坐  
 仲良しの背中合はせに菜花摘む  
 羽抜鷄金網にあるうらおもて  
 平がなはをみなの化身蝶よぎる  
 文庫本サイズの仮寝若葉風

佐藤 浩子 117 6  
 直江 裕子 118 2  
 鈴木 房州 118 2  
 高野 春子 118 3  
 竹内 絵視 118 4  
 高野 礼子 118 4

なかもと淑子

父も石母もまた石木菟が鳴く  
 歩を合わせくる父と母草紅葉  
 蠟燭の灯心ぢちと年詰まる  
 風あれば風の形にミモザの黄  
 若草を蹴上げ鉄棒決まりけり  
 かなしみとなりゆく怒り寒夕焼  
 浮世絵のおんな翳なき日永かな  
 平がなはをみなの化身蝶よぎる  
 箸置き唐子人形小正月  
 この星に言語はいくつ鳥渡る

加藤 法子 116 3  
 小林 俊子 116 4  
 金子 敏 116 4  
 小野富美子 116 4  
 佐々木幸子 117 6  
 鈴木美津子 118 2  
 島田 翠松 118 3  
 竹内 絵視 118 4  
 中村 博子 119 10  
 沼山美津江 119 11

倉岡 けい

脇役で終る奴ではない清水  
 蛭とは友になれない闇がある  
 少しずつ西へのめつていくすき  
 根から茎無言の悶え凌霄花  
 電柱が男を繋ぐ秋出水  
 とべバツ地球という星危ないぞ  
 邯鄲や黄昏といふ安堵感  
 溽暑かながんじがらめの杭に影  
 霧の枕木目覚めぬ中に始発出る  
 一釜を塩で握つて今年米

田村 隆雄 118 4  
 戸邊 光一 119 9  
 長瀬 聰子 119 9  
 広瀬 梯子 119 10  
 馬場 益江 119 10  
 藤田 富江 119 10  
 浜名 儀一 119 11  
 廣谷 幸子 119 11  
 野口 京子 119 12  
 渡邊 竹庵 119 13

津田沼研究句会報告

(於津田沼一丁目町会会館)

●第二八八回(平成二十八年五月十日)

司会 楠見 恵子

つばめ来る海抜ゼロのすべり台  
 三つ目の眼が開き青嵐  
 憲法記念日ほつかり空いた六埋める  
 初鯉せつつく人は居らぬのに  
 ありがたやと言つて粽解く媼  
 太々と嬉しき蚯蚓そこにおる  
 牛蛙鳴けばつまらなくなりぬ  
 日の高し戸を開け放つ蟻の家  
 チューリップクルスの下に血の色を  
 飛花落花とぎれとぎれの感情線  
 雨のあと目をつむる燕を拾う  
 手の中の動画いっばいの産声  
 葉桜の上に静かな空のあり  
 訛が売りのコメントーター寺山忌  
 留守電の赤き点滅薄暑かな  
 金の無心重ぬ夾竹桃まだ咲かぬ  
 爪先の躓き加減青蜥蜴  
 青い目の人形と眼が合う薄暑  
 楠若葉願ひ通じず地震続く  
 万緑に一身上の光加減

岡田 淑子  
 小林 実  
 池田 博臣  
 なかもと淑子  
 金子 未完  
 横須賀洋子  
 山中 葛子  
 股野 久子  
 吉野 精  
 徳吉洋二郎  
 楠見 恵子  
 イザベル真央  
 深山きんぎよ  
 佐藤 晏行  
 村上 澄子  
 榎垣 梧樓  
 前島きんや  
 林 阿愚林  
 大塚 弘毅  
 白木 暢子

●第二八九回(平成二十八年六月一十四日)

司会 前島きんや

眉太きてるてる坊主悪所なり  
 梅漬ける器量良しから順々に  
 噴水の向かう一膳飯屋なり  
 燕の子落ちてサイレン救急車  
 黒揚羽土を舐めては歳をとる  
 十葉に刺されたと泣く嫁御かな

小林 実  
 なかもと淑子  
 榎垣 梧樓  
 大塚 弘毅  
 楠見 恵子  
 横須賀洋子

●第二九〇回(平成二十八年七月十二日)

司会 佐藤 晏行

青鳥やもつこしだけくわんばらう  
 蛭と我が身をよぎる蟻の夜  
 悔恨のいつしか懐旧かきつばた  
 夏椿見知らぬ人の隣にて  
 麦の秋ふりむく身体を海という  
 花菖蒲かくし持ちたるスペアキー  
 嘘つきは喉がカラカラ青蜥蜴  
 銀翼の振動六月の青空  
 引返す体力がない甚平着て  
 ロボット君恋にやぶれて田植する  
 最果ての乳色眩し敦盛草  
 なくしたるものを探しに夏帽子  
 百合の花ちくちく刺さる目に刺さる

深山きんぎよ  
 徳吉洋二郎  
 池田 博臣  
 股野 久子  
 山中 葛子  
 村上 澄子  
 金子 未完  
 前島きんや  
 佐藤 晏行  
 吉野 精  
 イザベル真央  
 林 阿愚林  
 白木 暢子  
 楠見 恵子  
 池田 博臣  
 松崎あきら  
 佐藤 晏行  
 岡田 淑子  
 白木 暢子  
 大塚 弘毅  
 榎垣 梧樓  
 林 阿愚林  
 深山きんぎよ  
 竹中 華那  
 横須賀洋子  
 金子 未完  
 股野 久子  
 イザベル真央  
 徳吉洋二郎  
 山中 葛子

二十歳筋肉よりの汗匂う  
 恥ずかしい昨夜の浴衣下りけり  
 花ちゃんの金融工学雲の峰  
 賑わいのとどのつまりの冷奴  
 蚕豆のお歯黒つまむ赤き指

吉野 精  
 小林 実  
 前島きんや  
 なかもと淑子  
 村上 澄子

青葉研究句会報告

(於：千葉市民会館・第五会議室)

●第五十九回 (平成二十八年五月二十六日)

司会 石井紀美子

青葉木菟椈はどれもひとり分  
 屑籠に戦の活字西日差す  
 夕方は犀に似てくる忍ぶ恋  
 憲法の日少年靴ひも引きずって  
 ばたばたと話の腰を折る扇  
 父の日の椅子晩年を向いている  
 葉桜や遺言なんかするものか  
 青葉若葉魁夷の馬が駆ける朝  
 ひらがなのひらひら飛ばば夏の蝶  
 蛇衣を脱ぐ阿部定という女  
 青鳶の中に窓ある特許庁  
 青僧の発声鍛錬梅雨呼べり  
 青鬼灯の中で夢見るふる里は  
 テロの世や愚かさ嘆き虎が雨  
 羊歯るいるいゲノム編集進行中  
 捨て猫は三匹玫瑰の吐息

椿 良松  
 加藤 法子  
 小林 実  
 徳吉洋二郎  
 馬淵 津枝  
 石井紀美子  
 細野 一敏  
 矢野 忠男  
 山崎 幸子  
 細根 栞  
 鈴木まんぼう  
 並木 邑人  
 長濱 聰子  
 小高 稔  
 芝崎 梓  
 三須 民恵

●第六十回 (平成二十八年六月二十三日)

司会 矢野 忠男

だまされてやるか白玉よく冷えて  
 短夜の漁火水平線の動悸  
 時間という致死量西日迫り来る  
 ちよつとやそつとぶれない私アマリス

加藤 法子  
 長濱 聰子  
 石井紀美子  
 馬淵 津枝



渡れない梅雨は十本足で来る  
 父の日の隠しポケットの浅さかな  
 空つぼのポケットに入る夢と虹  
 希望という逃げ道があり肉桂水  
 喉絞めるあそび畳の上に鈴  
 千草の匂い少年にマリチ・ブラデー  
 心太すすりすかつと失恋す  
 涙目の空蟬に聞く胸の内  
 噴水の水の素顔に触れる私  
 興味湧く時代を繋ぐ古代蓮  
 守宮減り空家はかりの団地かな  
 濃紫陽花今宵この色このままに

三須 民恵  
 徳吉洋二郎  
 山崎 幸子  
 並木 邑人  
 小林 実  
 細野 一敏  
 鈴木まんぼう  
 細根 栞  
 小高 稔  
 大塚 弘毅  
 矢野 忠男

●第六十一回 (平成二十八年七月二十八日)

司会 鈴木まんぼう

誰も来ない日空蟬の中にいる  
 太平洋と風車夏の狂想曲  
 眼裏のほうたる戻る橋がない  
 カフカに会う愛逢月の地下喫茶  
 蟬しぐれ男社会を生き残り  
 断捨離の難しきこと著莪の花  
 風鈴の名残の風をもらひけり  
 万緑や思索という遊泳  
 蓮咲いてお椀のふちまで美味しい日  
 木下闇ごとく家族の私語漏れる  
 縫れ合う少年の日々ラムネ玉  
 桃ひとついかようにして縛るうか  
 膝少しくずして待てり吊忍  
 サンドアート原料は汗と山砂  
 柵あらば登りはじめる夏をんな  
 螢火や昭和の幼な記憶あり  
 梅雨あける地獄の門は更にあく

細根 栞  
 長濱 聰子  
 徳吉洋二郎  
 石井紀美子  
 細野 一敏  
 大塚 弘毅  
 鈴木まんぼう  
 松崎あきら  
 竹中 華那  
 椿 良松  
 馬淵 津枝  
 小林 実  
 加藤 法子  
 三須 民恵  
 並木 邑人  
 山崎 幸子  
 矢野 忠男

柏研究句会報告

(於：柏市「ハックルベリー」2階)

●第四十八回 (平成二十八年五月十四日)

司会 野口 京子

イカロスの翼百足のガレー船  
 過去からの紐に繋がる燕子花  
 青鷺の幸ふ池ぞ地震の国  
 さくら追い疾走のまま幕おりる  
 夏木立エクスセルシグマ開きけり  
 春塵にまみれ五千の兵馬備  
 家増えて本丸跡も青葉騒  
 逃げ水や涙をぬぐう指一本  
 運河までみどりの帯となる車窓

長井 寛  
 下村 洋子  
 伊藤 希眸  
 佐藤 鈴子  
 イザベル真央  
 小張 直子  
 小林 俊子  
 栃木 きよ  
 野口 京子

●第四十九回 (平成二十八年六月十一日)

司会 長井 寛

血脈の行き着く先や立葵  
 風薫る象のはな子の大往生  
 トマト浮きささ波朝をまぶしめる  
 漁火の波すじ紡ぐ夏の星  
 額の花身辺整理は子に託す  
 二足歩行夏のかげろふ川に沿ひ  
 夕立来てトタン屋根より狂詩曲

下村 洋子  
 岡田 春人  
 栃木 きよ  
 小林 俊子  
 小張 直子  
 伊藤 希眸  
 長井 寛

●第五十回 (平成二十八年七月九日)

司会 長井 寛

夾竹桃快樂不退の人工島  
 桜んぼゆつくり呑みこむ隠し事  
 戸袋の守宮疾走白装束  
 本日はお日柄もよくあやめ舟  
 夏葉黄の狂気の朱とたそがれて  
 二百坪土地を探して半夏雨  
 かあさまと馬車で来た道都草

小林 俊子  
 栃木 きよ  
 佐藤 鈴子  
 岡田 春人  
 下村 洋子  
 野口 京子  
 長井 寛

# ひろば

## ■平成二十八年度千葉県俳句作家協会総会開催

— 俳句大賞・協会賞 贈呈式 —

五月十五日、総会に先立ち、第一回千葉県俳句大賞及び千葉県俳句作家協会年度賞の贈呈式が行われ、総会終了後は俳句大会が行われました。

### 俳句大賞受賞者

大賞 句集『海路』 大串 章

準賞 句集『瀬の祭』 三苦 知夫

奨励賞 句集『展翅板』 林 ゆみ

### 協会賞受賞者

協会賞 「滝白し」 滝口 滋子

次席 「晩秋」 湯浅 康右

佳作 「不老門」 原 瞳子

佳作 「残り時間」 清野 敦史

佳作 「はろばろと」 平野みち代

### 俳句大会作品集

#### 〈特選句〉

三苦知夫顧問特選 目玉にちから火の国の鯉のぼり 徳吉洋二郎

水見壽男顧問特選 声掛けて行く母の日の郵便夫 三苦 知夫

能村研三会長特選 生きているものやわらかし新樹光 倉岡 けい

増成栗人副会長特選 鶏小屋に鶏のかたまる麦の秋 塩野谷 仁

塩野谷 仁副会長特選 こどもの日話も見える糸電話 平山 武彦

秋尾 敏理事長特選 夏が来る水平線を引き直し 徳吉洋二郎

川台憲子副理事長特選 生きているものやわらかし新樹光 倉岡 けい

田所節子事務局長特選

行く春のぼんぼん時計が鳴っている 細野 一敏

〈互選結果〉(二十位までの上位入賞者)

○内数字は二句合計の得点による順位

(俳句は一句のみ掲載)

①夏が来る水平線を引き直し 徳吉洋二郎

②生きているものやわらかし新樹光 倉岡 けい

③声掛けて行く母の日の郵便夫 三苦 知夫

④立浪草風の起伏は野の起伏 村上喜代子

⑤鶏小屋に鶏のかたまる麦の秋 塩野谷 仁

⑥緑の羽根いくつつけたら空翔べる 高橋富久江

⑦噴水のいつも一途といふ孤独 三枝 青雲

⑧白南風や地声の太き漁師妻 吉田 安子

⑨惜春の山ふところと言ふところ 川合 憲子

⑩水よりの風に薄暑を覚えけり 染谷 卓

⑪炎屋にくるり返るや得点板 古谷 誠司

⑫桐の花古文教師の電子辞書 平岡 育也

⑬金魚玉水の形を丸くする 細野 一敏

⑭麦の秋少し歩いて帰ります 西澤 照雄

⑮夏薊トトロのバスはもう来ない 清野 敦史

⑯梅雨館隠れ部屋めく初二階 能村 研三

⑰代筆の近況便り余花の雨 原 瞳子

⑱夏立ちにけり古民家に火の匂ひ 伊藤 隆

⑳地の底の魔神しづめよ時鳥 山崎 幸子

㉑静脈をたたき採血半夏生 (石井紀美子記)

## ■「玄瀧」代表に森章氏就任

昨年ご逝去された神山宏氏の後任として当協会会員の森章氏が就任されました。

〈玄瀧〉

平成二十一年四月、東京で俳句同人誌として創刊。師系嶋野國夫 「季刊」

## 新会員・会友紹介

野田市清水 大澤 重市(会員)

(推薦者 実羽 繁)

藁寸沙の混じる燕のマイホーム

父の背に灸の二つ原爆忌

満腹の重心揺らぎつつ飛ぶ蚊

千葉市美浜区 東 公子(会員)

(推薦者 渡辺 澄)

大西日ついてくる影捨てようか

クレソンの苦みほどほど父のことは

秋の蝶泥の大河を渡りけり

四街道市大日 望月 彩(会員)

(推薦者 秋尾 敏)

誰も来ぬひと日終るや早星

星祭り生きた証を又一句

川とんぼゆらりと交す虚空界

## 秋の吟行会のお知らせ

場所 小江戸「佐原」

小野川沿いの街並みと伊能忠敬の足跡を訪ねて

日時 平成二十八年十月三十日(日)

句会場 香取市佐原中央公民館三階 大会議室

詳しくは別紙チラシをご覧ください。皆様のご参加を楽しみにしています。

企画部一同

### 《会員・会友の近況》

- ・「現代俳句千葉」を楽しみにしております。私も身体が動き皆さんに迷惑を掛け無いようには、俳句のこと、地元の小学校のボランティアのこと、あちこちに出掛けることなどをして居ります。(山崎 幸子)
- ・金子兜太氏の「他界」を読む機会があり、死者は彼の世で生きているという説に大いに共感致しました。俳句仲間であった夫も、彼の世で楽しんでるのだなと思うこの頃です。(井上きよ美)
- ・半月ばかり九州に行っていたので地震の洗礼を受けて帰って来ました。(青木 一夫)
- ・先日、高野ムツ才氏の講演「三・一一と俳句」で、東日本大震災の被災者の句に思わず胸が詰まりました。(池田 和人)
- ・青葉俳句諸先輩に学ぶこと多く、あつと言う間に五年目に突入、直情径行形を反省しつつ自分は自分だと慰めています。(加藤 法子)
- ・膝の加齢とか軟骨が減り、週に二度程リハビリに通っています。趣味の俳句、コーラスも三ヶ月ばかりお休みしてしまい、家でゆっくり句を作ったり、現代俳句誌を読んだり勉強になりました。(川又 優)
- ・月に二〜三度吟行句会を楽しんでいます。俳句をつくるときの緊張感が好きです。(大木 明子)
- ・高齢兄弟家族の終活中で、病院を飛び廻り医学生スの如くキラキラ(?)です。(加納ひでこ)

・年齢と共に何をすることもスローとなり、歯痒い思いをしております。誤字がなければ良いなと心配しております。(大木 涼子)

### 掲示板

#### 《会員・会友異動》

- 入会 (会員) 滝沢泰斗、徳田悠子、松沢貞津、松本千花、村田黙己春、安田時空
- 退会 (会員) 大川園子、佐藤獅子夫
- 転入 (会員) 竹中華那 (神奈川県より)
- 移転 (会員) 松崎あきら (神奈川県より)
- 移転 (会員) 林阿禺林 (野田市野田へ地区内移転)
- 移転 (会員) 山崎公子 (野田市花井へ地区内移転)
- 移転 (会員) 片岡秀樹 (千葉市緑区へ地区内移転)
- 移転 (会員) 川上典子 (流山市野谷へ地区内移転)

#### 《平成二十八年年度第二回幹事会》

日時 平成二十八年五月十七日(火)  
午後六時より

場所 船橋市勤労市民センター

#### 議題

- 一、平成二十八年年度定期総会・俳句大会の結果と収支報告について
- 二、平成二十八年度春の吟行会の結果と収支報告について
- 三、平成二十八年度秋の吟行会・ミニ吟行会計画について
- 四、第一二一号会報について

- 五、現代俳句協会(本部)の動向について
- 六、第二十三回関東甲信越静ブロック会議について
- 七、各研究句会の状況について
- 八、平成二十九年年度俳句大会について
- 九、その他

#### □ 事務局・編集部だより □

- 秋の吟行会、チラシを同封しておりますので、皆さんお誘い合わせの上、ご参加ください。
- 平成二十九年年度俳句大会の作品募集が始まりました。こちらもチラシを同封しています。多数のご応募お待ちしております。
- 「ひろば」のコーナーで各地区の俳壇の活動を幅広く紹介していきたいと思っております。俳句大会等のニュースを編集部までお寄せください。

<p>現代俳句千葉 第一二二号 平成二十八年八月三十一日発行</p>	<p>発行人 千葉県現代俳句協会 会長 秋尾 敏</p> <p>現代俳句千葉編集部 〒261-0004 千葉市美浜区高洲 三十五-六-1602 徳吉洋二郎</p> <p>千葉県現代俳句協会事務局 〒278-0043 野田市清水五 二七-1-0 高橋 宗史</p> <p>TEL・FAX ○四一七一二五-1三三八二</p>
--	--